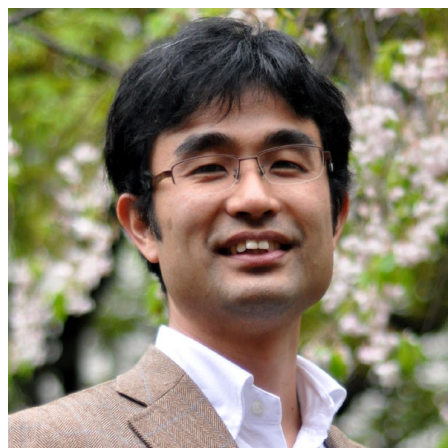


藤原辰史さん 講演会

「雑多なもの」の賑わいを求めて

暴力と破壊の世紀を振り返りながら



異質なものをどう受け止め、
あたらしい「政治」のかたちをつくりあげるのか。
来るべき時代のあたらしい本源的な言葉を求めて・・・。

日本の歴史研究者、京都大学人文科学研究所准教授。
北海道生まれ。博士論文は「ナチス・ドイツの有機農法：
「自然との共生」はなぜ「民族の抹殺」に加担したのか」。
2013年、「ナチスのキッチン」で第1回河合隼雄学芸賞を受賞。
2015年に結成された「自由と平和のための京大有志の会」発起人。

2018.5.20(日) 13:30～16:30 (開場13:00)

会場：平和と労働センター・全労連会館2階ホール
東京都文京区湯島2-4-4

主催：いのちと暮らしを支える医療・介護・福祉の会

【問い合わせ】Mail: heiwa.inochi@gmail.com 【参加費】1,000円

Tel: 090-3312-7607



この講演会が、藤原辰史さんのお話、言葉を手がかりに、私たちの生きる社会に向き合う時間となり
未来への一歩を踏み出す力になればと思います。どうぞ参加ください。

下記に、藤原さんの書かれたものから一部抜粋しました。



わたしは 現代社会というのは住み心地が悪いところだと
感じています。自分は楽しく生きているという人もいるかも
しれないけれど、その人でさえ、貧困や格差などの問題が
あるために楽しむことに後ろめたさを感じるような時代は
非常に生きづらいと感じているんです。その根源を探って
いくと、どうやら食べ物がおかしくなっているのではないか
という思いに襲われるんですね。

「食べることを考えること」58頁より

トラクターが戦車に、
化学肥料が火薬に、
毒ガスが農薬になった！
「戦争と農業」の帯より

「食べること」は胃の腑で終わらない永遠性と循環性を
もつ現象である以上、人間は、自分以外の人間や生物
との、刻一刻と変わる即興的な相互作用のなかでしか
生きていけません。遅効性が即効性に先立つ仕組みこ
そが、生きやすい仕組みではないでしょうか。

「戦争と農業」190頁より

せんそうは 「ぼくが ころされないように さきに ころすんだ」
という だれかの いいわけで はじまります

せんそうは はじめるのは かんたんだけど おわるのは むずかしい

あたしの こころは わたしのも
だれかに あやつられたくない
あたしの いのちは わたしのも
だれかの どうぐに なりたくない

じゆうと へいわの ための きょうだい ゆうしの かい・わたしの『やめて』より

【主な著書】

「カブラの冬」(人文書院)
「稲の大東亜共栄圏」(吉川弘文館)
「ナチス・ドイツの有機農業」(柏書房)
「食べることを考えること」(共和国)
「[決定版]ナチスのキッチン」(共和国)
「トラクターの世界史」(中公新書)
「戦争と農業」(集英社インターナショナル)